

## 駿河湾の深海魚 (5)

### ススキハダカ (その1)

久保田 正・佐藤 武



図1 ススキハダカ 体長68.5mm, 雌、駿河湾産



図2 アラハダカ 体長67.0mm, 雄、駿河湾産

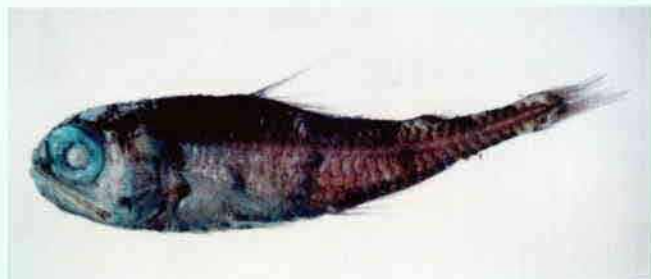


図3 トゲハダカ 体長56.0mm, 雌、日本近海産

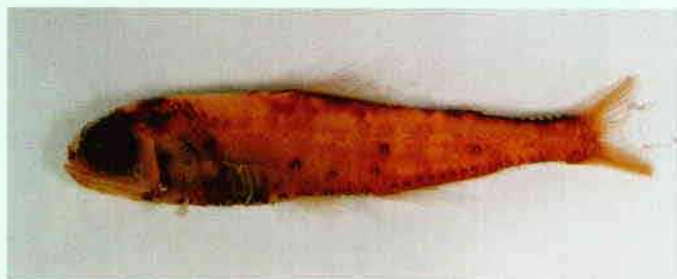


図4 マガリハダカ 体長57.0mm, 雄、日本近海産

ススキハダカ *Myctophum nitidulum*は、ハダカイワシ科魚類に属するススキハダカ属の1種で、太平洋、大西洋、インド洋の温・熱帯域の広い海域に分布しています。体長は、雌雄共に75mm位になります(図1)。

前々報(33号9p)のイワハダカ(その1)で述べた本科魚類の夜間の分布様式の区分によると、本種によって代表されるススキハダカ属は①の海面上昇群に含まれます。昼間は水深200~400m位のわずかに光の届く水層に生息していますが、夜間には餌をもとめて0~1m位まで上昇し、明け方には再び深い層に戻るといった日周鉛直移動を繰り返します。本州太平洋側の駿河湾を含む日本近海では、日没後にプランクトンネットを用いて表層水平曳きして得られる海面上昇群の中ではススキハダカが最も多く、優先種として知られています。ススキハダカ属には、本種以外にアラハダカ(図2)、トゲハダカ(図3)、イバラハダカ、ヒサハダカ、ウスハダカなど8種類が含まれます。このような生活をする魚が存在するために、夜間には海面でも深海魚を採集できるのです。かつて夜間に表層で採集されたススキハダカを船内で直ちに水槽へ移し飼育を試みましたが、水槽の壁面に衝突して鱗が剥がれてしまい長時間の飼育は困難であることを認識したものです。

また、ススキハダカ属の本種やヒカリハダカ、ナガハダカ属のマガリハダカ(図4)さらにブタハダカ属のブタハダカなどの多くの種類の鱗は円鱗(えんりん)で、プランクトンネットに入った後の曳網中に鱗がほとんど剥がれてしまいます。一方、ススキハダカ属のアラハダカ(図2)、トゲハダカ(図3)、イバラハダカ、ウスハダカなどの種類は、剥がれにくい櫛鱗(しつりん)を有しています。このようにススキハダカ属内には円鱗と櫛鱗を有する両方の種類が存在しています。ススキハダカという和名の命名者は不明ですが、鱗の剥がれた地肌の色がススキの穂が枯れて少し白っぽくなった状態と良くにているので付けられたと思います。

日本における本科魚類の本格的な研究は、海面上昇群の亜寒帯海域に分布するホクヨウハダカや日本近海に分布する本種の標本を用いて開始されました。当時、日本近海に分布するススキハダカの学名は*Myctophum affine*でした。1963(昭和38)年頃に京都大学農学部水産学科の岩井 保先生が太平洋産と大西洋産の*M. affine*の標本を比較したところ、鰓蓋骨の後縁の上部の形状が大西洋産では丸くそして太平洋産では鋭角であること、さらに鱗が大西洋産では櫛鱗であることなど明らかな違いがみられ、それまで太平洋産の*M. affine*とされていた種は別種であり、*M. nitidulum*であることが明らかにされました。